

昭和初期山形県新庄の娼妓の恋文

飯島 一彦

A Love Letter Written by One Prostitute at Shinjyo city,
Yamagata Pref., in Early Showa Period

IIJIMA Kazuhiko

獨協大学外国語学部言語文化学科

マテシス・ユニヴェルサリス 第3巻 第2号

2002年3月25日 発行

Mathesis Universalis Volume3, No.2

Department of Language and Culture, Faculty of Foreign Languages,

Dokkyo University, Japan

March 2002

昭和初期山形県新庄の娼妓の恋文

飯島 一彦

平成十三年八月、山形県最上郡真室川町の民俗歌謡調査の際に、同地の郷土史・民俗誌に詳しいS氏より一通の巻紙の手紙をご恵贈いただいた。さる寺のご住職より研究に役立てるように拝領なさったものだそうだが、その際にご住職はゆえあつて末尾を引きちぎってお渡しになったそうである。その理由について詳述する必要もないだろう。要するに当地のさる人物に送られた手紙だというのがわかれば差し障りがあるということなのである。その人物の遺族が寺に寄付した什物の中にたまたま含まれていたものようである。

年代的には昭和初期のものだらうとS氏は言う。地元的事情に大変面白い氏は、この手紙に登場する人物が誰かをむろんよく知っており、内容から見てその人物がそのような手紙を受け取る時期はそこらだろうと推測されたらしい。

真室川町は例の「真室川音頭」で有名な土地である。第二次世界大戦前に、樺太の缶詰工場で歌われていた「女工節（ナット節とも）」が、真室川（鮭川）の上流に金山が発見されて鉱夫が大量に流入してきて町が急に活況を呈していた頃に変形されて歌い出されたのが、丁度昭和初期という。戦時中は陸軍の飛行場があり、特攻兵たちが覚えて全国に広めたという説もあるが、その後レコード化されて知られるようになり、特に戦後急速に全国に広まったとされる、知名度の高い民謡である。もともと一杯飲み屋で騒ぎ歌として歌われていたという素性をはっきり

している歌で、当初「わたしや真室川の花電車、ただで乗せますどこまでも……」などという猥雑な詞で歌われているものを

わたしや真室川の梅の花 コーリヤ

あなたまた新庄の鶯よ

花の咲くのを待ちかねて コーリヤ

つぼみのうちから通ってくる

ア、ドントコイ、ドントコイ

というように少しく上品に仕立て直したものがよく知られている。

もともと真室川町（安楽城村と及位村が合併）は秋田県境に接する山間僻地で、旧藩時代から地内を流れる真室川・鮭川周辺の狭い地域での稲作の他は、山仕事に頼るしかない土地柄である。他にこれといった産業がないという状況は現在でも変わらず、過疎化に悩む地方町村の一典型と言つてよいだろう。明治三十七年に開通（三十八年全線開通）した奥羽本線真室川駅前に小市街ができるのは、産金景気に沸くようになってからという。銘酒屋や、女性を抱えた店も市街のはずれにでき、金を現金に換えた鋳夫でにぎわったという話も伝えられているが、比較的富裕な階層が遊びに出かけるのはもっぱら、南二十キロ程にある、新庄だったようである。

新庄は最上盆地の中央にあつて山形県北の中心地である。近世初期に最上氏が改易を受けた後は、戸沢氏十一代がずっと続いて支配した新庄藩の城下町で、最上川の水運を利した産物の集散地としてかつては大変栄えた都市であつた。現在でも祭りに山車を出す山車町が残っており、かつての繁栄ぶりを窺わせる。おそらく遊里も繁盛した

であろうが詳しいことはわからない。真室川も新庄藩の所領の一部であり、徒歩で朝早く出て無理をすれば、所用を新庄で済ませて一日で帰つて来られる距離であつたという。

S氏によれば、この手紙は真室川の某氏が新庄の娼妓からもらったものであるという。しかし、内容からそれを確かめることは難しい。某氏がそれを大事に持っていた経緯も定かではないし、由来不明の手紙であるとしか言いがたない。だが、この古風ではありながら稚拙でもある熱烈な恋文が、一般の子女が男性に宛てて書く手紙としてはそぐわない面をいくつか持っていることも確かである。

決して上手とは言えない筆跡ではあるが、散らし書き風の連綿体はひなびた風雅を示していると言えないこともない。通常の初等教育での書道を越えた、仮名書道の連綿体をまがりなりにも少々は練習したと思われる。内容にも、ある程度の教育を受けたに違いないと思わせる文芸的な素養をうかがわせるが、表現としては拙劣な部分も目立ち、正統的な学問を享けたとは言えそうもない。所々に混じる方言や脱字や歴史的仮名遣いの誤りのある表記は、発音そのままをしたための近世期一般庶民の記した文書・手紙にもままある事例であり、文語的な正書法を知識として持たない人々の書き様である。

つまり、近代に入っても近世風の文化を色濃く残していたはずの一地方都市の、どの階層に属した女性の手紙であると特定できる手がかりを持つているとは言えないが、少なくとも上流階級の子女の手紙ではなさそうである。かといつて一般庶民の子女がこのような恋心を、手紙に直截表現することができるような時代でもないはずである。ある程度手紙を書くことに手慣れた筆致を感じさせる。

近世期、遊里の女性は客が少なくなると馴染みの客に恋心を綴った手紙を送って登楼を促すのが常だったという。いわゆる手練手管の一つだったのである。古典落語の「三枚起請」などにもその余韻が残されていて、したたかな女郎が同じような文面の手紙（熊野午王のお札に起請文を書いたもの）を何枚も送って、それを受け取った馴染み

客が手紙の内容を本気にして出掛けると、同じ手紙を持った知り合い三人が出くわして手紙の内容が本心ではないと判明し、相談して女郎を懲らしめるという話である。女郎の手紙を真に受ける男心の間抜けさと、したたかさを通り越して詐欺師的でもある女郎の振る舞いの、両者に対する諧謔が込められている。

恋心を訴える内容と手慣れた筆致から、この手紙が娼妓のものであるとすることにあまり違和感はない。しかし、では手練手管の一つとして出された手紙であり、管見ながら遺例を見ることがない地方都市の娼妓の典型的な客への誘いの手紙なのかという点、もう少し実感が込められたようにもとれる。恋心を表現するのに切実な事情が存在していた風でもある。というのも、この手紙の内容は、直接的には返事をくださいというもので、決して再登楼を促すような内容ではないからである。男性に対して、たとえ会えなくともどういう気持ちで思っているのか返事を書いて安心させてください、と伝える文面からは、一人焦がれる身の真情を明かしたものととれよう。

この文面のもう一つの特徴は、冒頭直後からなだらかに移行していく七五調が、手紙の表現として生きていることである。語りを基本とした七五調の美文体は、鎌倉時代成立の『平家物語』に始まって、近代に至るまで絶えることのない日本の口語的表現伝統であると言つてよいが、この手紙もそれをきちんと背負って表現されている。

形式的に見れば、江戸時代中期には七五調の長々とした歌曲（箏歌や長唄等）はすでに完成しており、それ以前にも謡曲の例がある。しかし、それらがまさしく美文調であって、「綴れの錦」的に文飾を重ねる表現上の要求から七五調に収束していったと考えられるのに対して、この手紙の文体をより時代に即して言えば、明治時代後期に全国的に流行する「口説き」（八木節の類）の内容・形式に近く、また「鉄道唱歌」や「孝女白菊の歌」、「桜井の訣別」等に見られる唱歌調とも言つてよい。いわば歌謡調なのである。

手紙文の典型である候文体をとりながら、そこに歌謡的七五調美文を方言混じりで取り入れるというのは、形式的には自由度が高い女性の手紙文であるとはいえ、遺例としてはなかなか希有に属するのではないだろうか。

山形県の庶民が近世近代を通して、早物語や浄瑠璃・地芝居などの語り物的芸能環境が色濃い中で暮らしていたのは紛れもない事実である。むしろそれは山形県に限ったことではないが、そのような芸能環境の濃い中で生活から生まれた恋心を訴える手紙の文体として口語的（歌謡的）七五調を用い、掛詞や芝居がかった言い回しで表現しようとしているのはとてもおもしろい。

本稿でこの手紙を紹介するのは、文芸性が高いなどという理由からではない。稚拙だが精一杯心情を述べようとする表現行動の中に、右に述べたような庶民の文芸伝統が脈々と息づき、そこになまなましく表現された地方庶民の生活感情の一端をご覧に入りたいからであった。ともすれば東京・京都・大阪中心主義に傾きやすい日本の文学研究に対して、地方の、しかも庶民生活の文芸伝統という視点を明らかにする証拠の一つとして、この手紙は貴重である。

以下この手紙の影印を示し、本文の翻字と簡単な注釈を試みた。

※ この手紙は縦約一五・八糎、横一〇三・五糎、ごく薄手の美濃半紙を三紙（第一紙約三三糎、第二紙約四〇・五糎、第三紙約三〇糎）継いである。第三紙末が切られているが、長さから見て切られた部分はさほど長くはないはずである。

なんと岩間いわたまのこげの
 おもいきられぬ
 あめあめのうぢうぢ
 あめのふらぬ日は
 あるなきとあるなきと
 おまい思わぬ
 時はなし
 御前ごぜんのおもかげ
 まいまい
 あんしあんし
 はねをきみれは
 ゆんへみため
 又みだが

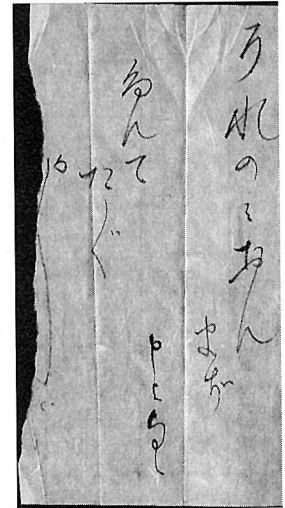
なんと岩間のこげの
 おもいきられぬ
 むし(注七)
 むねのうぢ(注八)
 あめのふらぬ日は
 あるなきと(注九)
 おまい思わぬ
 時はなし
 御前のおもかげ
 まい(注十)にたちて
 あんし(注十二)したいと
 はねをきみれは(注十二)
 ゆんへみため
 又みだが(注十三)

恋しき
 一筆いちひつそめ申しんしまいらせ候
 さでとやせんころ
 たよりおあんじすにも
 いまだ
 なんのたよりなき
 うつらくと
 なきくらし
 夜とも日とも
 おまい(注五)のみ
 あんじくらし
 けふまでは
 よふく月日を
 を(注六)くりしが

〈翻字と注〉
 恋しき(注一)あまりに
 一筆そめ申し(注二)ませ候
 さでとやせんころ(注二)
 たよりおあんじすにも(注三)
 いまだ
 なんのたよりなき(注四)
 うつらくと
 なきくらし
 夜とも日とも
 おまい(注五)のみ
 あんじくらし
 けふまでは
 よふく月日を
 を(注六)くりしが

は (注十八) たしの心
 おもいば (注十九)
 ばすや (注二十) にも
 風にもだまされる (注二十一)
 人目お (注二十二) しのんで
 かいだるふみお (注二十三)
 ま、になるなら (注二十四)
 へんじだけ (注二十五)
 かいで送りて
 くだされたく

なんとお察しくた
 されや
 我身のうれしき
 ゆふはがりなし (注十四)
 此かばかりわ (注十五)
 うんたるおさん (注十六)
 あんしん
 なしてくだ
 されや
 わたしと
 おまいはみそめ
 うゑ (注十七)
 今やも
 くるかと



そのみおん

まぢ(注二十六)

申上まいらせ候

謹んで

たゞ

申上候

(以下欠(注二十七))

注一 東北一般の発音傾向であるカ行タ行の濁音化の正直な表記、以下にも幾つか見られる。

注二 「さてとや先頃」か。「さて先頃より」をばかした言い方。

注三 「便りを案じすにも」か。「案じす」は方言的な表現で謙譲の敬意表現が込められていると思われる。

注四 「く」とあるべきかと思われるが、濁音化した発音をこう表記したものか。

注五 「おまえ」、「え」と「い」の発音の交代もしくは混交は関東から東北にかけての一般的現象である。

注六 「お」とあるべき所。

注七 「何といわまのこけの虫」、「いわま」に「言わ」と「岩間」、「こけ」に「苔」と「虚仮」が掛けてある。「何を

言うこともできない、岩間の苔のようなみすばらしい存在のわたしは、仮の世に生きる虫のように軽い存在であるけれど」の意。

注八 「胸の内」

注九 「あるなれど」とあるべき所。あるいは「あるなきと」のままで、「おまい」の耕作する田畑の水利を遠くから心配している気持ちを含めたものか。だとすれば手紙が書かれた季節もある程度限定されてくる。

注十 「前」、「眼前」の意か。夢の中で愛しい男が眼前に立つのを見たというのであろう。相手が夢の中に現れるのは相手がこちらを思っているからという発想は平安時代以来の文芸伝統である。

注十一 「安心」、「ん」が落ちたもの。

注十二 「跳ね起き見れば」

注十三 「夕べ見た夢、又見たが」

注十四 「言う計りなし」、「夢で久しぶりに会って、その嬉しさは言い表せないほどである」の意。

注十五 「は」

注十六 「運太郎さん」か。

注十七 「見初め上」か。「相思相愛の身の上」の意か。

注十八 「わ」

注十九 「思えば」

注二十 「馬車」か

注二十一 風が愛しい男の来訪を暗示するのは万葉集以来の表現伝統である。

注二十二 「を」

注二十三 「書いたる文を」

注二十四 「思い通りになるならば」の意。相思相愛は前提で、自分も人目を忍んで書いたのだから、あなたにも手紙を書く時間があればという気持ちを込めている。典型的な「忍ぶ恋」である。

注二十五 「返事だけ」、「返事だけでも」の意か。

注二十六 「待ち」

注二十七 おそらくこの後に尾句と宛名と差出人の名前があつたはずである。たとえば「かしく／うんたろおさん
おんもとに ○○まゐる」のように。